仏壇と日本人
仏壇に語りかける日本人のアイデンティティ（2）

「涅槃に故人は逝かれ、墓にお骨があって、家に仏壇がある。故人の魂の居処は一体どこなんだ？…欧米人には、理解しがたい矛盾も日本人は曖昧性をもって全てを包み込みます。仏壇は、死んでも同じ家の中で魂は過ごす同居の証です。」（前号から）

「アーナンダよ。お前たちは修行完成者の遺骨の供養にかかずらうな。どうか、お前たちは、正しい目的のために努力せよ。正しい目的を実行せよ。正しい目的に向かって怠らず、勤め、専念しておれ。」　（大般涅槃経）　…釈迦の言葉です。

仏教はインドから中国へと伝播し、民衆に広がる中で、漢民族の道教や儒教の先祖供養の民間信仰と習合し、仏教は葬送儀礼も担うようになりました。そして位牌は、儒教の葬礼に用いられる神主（しんしゅ）が仏教に取り込まれたものと考えられています。

仏壇の起源は、江戸幕府がキリスト教弾圧の下、仏教徒の証として各家庭に作らたことに始まります。加えて檀家制度を設け、いずれかの寺院を菩提寺としてその檀家となる事を義務付けました。寺院は一定の信徒と収入を得られる代わりに、他宗派の信徒への布教や新しい寺院の建立は禁止されました。葬式仏教の始まりです。こうして日本人の宗教は日常から離れ、葬儀に特化されました。僧侶は安定収入を得た代償に、お釈迦様の言葉を忘れました。これが「日本人には宗教が有って無い」「坊主丸儲け」と言われる所以です。欧米人には理解しがたい矛盾や宗教観は、こうした歴史文化、政治の影響や変遷に由来しています。

「日本人はその自我をつくりあげてゆくときに、西洋人とは異なり、はっきりと自分を他に対して屹立しうる形でつくりあげるのではなく、むしろ、自分を他の存在のなかに隠し、他を受け容れつつ、なおかつ、自分の存在をなくしてしまわない、という複雑な過程を経て来なくてはならない。」（河合隼雄）

日本人のアイデンティティは、欧米や中国、韓国とも違うのは、地勢学的、歴史的な民族性に基づくものと考えます。欧州は植民地主義、米州は開拓者精神に基づいた個人主義や合理性、多民族性があり、中国は大陸的な中華思想、韓国は中国と地続きの関係性…対して日本は島国としての独立性、そして武士社会（幕府制度、士農工商、鎖国、キリスト教弾圧等）の中で、独自の自我が形成されていったと推察します。鎖国では、国の自我を内に向けるとともに、出島を作ってこっそりと外交も保ちました。キリシタンや農民は、弾圧や搾取の中、隠れながらも自身を保とうとしました。自分を他の存在のなかに隠し、他を受け容れつつ、なおかつ、自分の存在をなくしてしまわない…それは日本として、日本人として生き延びる知恵でもあったと考えます。

仏壇に手を合わせ、先祖や故人に語りかける日本人の姿…ほんのひとつの物（仏壇）やひとつの所作（合掌と語りかけ）にも、長く・深く・重い歴史が刻まれています。